

S. カズヌーブに関する若干の資料

澤 護

1867年7月27日（慶応3.6.26）、江戸城大手御門内広場において、ナポレオン三世より大君に贈られたアラブ馬25（26）頭の公式贈呈式がとり行われた。これらの馬はフランス艦・クルーズにより輸送され、1867年5月29日に横浜港に着き、その後は一ツ橋（雉子橋）にあった幕府の厩舎で飼育されていた。

この時の海上輸送中の飼育や世話、さらに日本到着後の調教や馬匹改良を任された人物がカズヌーブであったとみなされ、この点についてはすでに発表したことがある¹⁾。本稿は、その後に確認することのできた資料を基に、カズヌーブの追跡をしようとするものである。

イタリア、フランスを中心に当時ヨーロッパでは蚕の卵に疫病が発生し、養蚕業は大打撃を受け全滅の危機に瀕していた。そのため、イタリアなどでは日本の蚕種紙に目をつけ大量の輸出を求めてきた。折しも、フランスは親日外交政策をとり幕府とはかなり親しい関係となっていたため、1866年（慶応2）に幕府はナポレオン三世によく精選した蚕種紙3万枚を贈呈し、これがフランスの養蚕業者を救うことになった。

この返礼として贈られてきたのがアラブ馬25頭（牝馬15頭、牡馬10頭）で、日本産馬の改良のため幕府が大きな囑望を抱き、強く求めていたナポレオン三世よりの贈物であった。このアラブ馬をアルジェリアより輸送する任務を命じられた責任者はダンクール（F. d'Hincourt）中尉で、他に馬匹飼育調教師ら10数名の兵士がいた。この馬匹飼育伍長がカズヌーブ（Simon Cazeneuve）と判断してまず間違いないとみなされるが、1867年5月29日

横浜入港のクルーズ艦（Creuse）の記録は下記のようになっていて、ここにはカズヌーブの氏名はない。おそらく、身分が低いということで、船客名簿から彼の名前が省かれたものであろう。

“In the Creuse, from Saigon.

The Count d'Incour, Capt. Broquet, and company of Marines 20 Arab horses from the Emperor to the Tycoon.”²⁾

ダンクールは来日して間もなく先に来日していた第1次陸軍顧問団15名の中に組み入れられたが、カズヌーブの方は契約が遅れ10月頃にずれこんだようである。1867年中の横浜下船の乗客名簿を丹念に調査しても、カズヌーブの名前を見出せないなので、先のクルーズ艦での来日とみなしてよいものと判断される。

カズヌーブは幕府の瓦解後、上官であったブリュネ大尉（J. Brunet）の行動に賛意を示し、乗っ取った開陽丸に乗り1868年10月4日に品川から箱館へ向かい五稜郭に籠った。箱館戦争では松前守備隊の指導者として、彼は各地より集まってきた日本人兵の訓練にあたっていたが、1869年5月27日の官軍艦隊の砲撃の際に、弁天岬御台場で脚踵を撃たれ負傷した。

1869年6月9日、政府軍からの艦砲射撃に完全に打つ手を失った榎本軍を目の前にし、ブリュネ大尉は部下に対し箱館からの退去を命じ、箱館港に待機していたフランス艦・コエトロゴン（Coëtlogon、150トン）の艦長に収容を願いでた。

フランス人たちを乗せたコエトロゴン艦は、途中の悪天候のせいなどもあって、横浜入港は6月15日のことであった。箱館戦争に荷担したフランス人の横浜上陸が伝えられるや、フランス人排斥運動がすぐに持ち上がり、実際にフランス人に対する暴行事件も発生した。

苦境に立たされたウートレー公使は、直ちに明治新政府にフランス人の箱館からの脱出には手を貸していないことを伝え、同時に榎本軍に加わった彼らを捕虜として艦内に監禁し、本国送還を約束した上で、本国での厳

正なる処罰を伝えた。新政府との軋轢を恐れたフランス側の対応は、このとき実に迅速なものがあった。

横浜でコエトロゴンからデュプレックス (Dupleix、1700トン、砲10門) 艦に乗り替えさせられたフランス人たちは、1869年6月19日に横浜からサイゴンへ移送された。しかし、重傷のカズヌーブはとても航海には耐えられないということで、横浜居留地にあったフランス海軍病院にて治療を受けることになった。

脚の傷が癒えたカズヌーブは、1869年12月26日フランス郵船・ラ・ブールドネ号 (La Bourdonnais、944トン) に乗船し、横浜より取り敢えずサイゴンへと向かった。しかし、下士官であったカズヌーブがフランスに帰っても昇進の道はとてもなく、先に出国した数人のフランス人と共にサイゴンに滞在しては、再度日本へ行き活動する機会を狙っていた。

カズヌーブの再来日の正確な日付は、今もってわからない。しかし、榎本軍に加わり国外放逐されたかたちの3人のフランス人下士官は、1870年5月7日に再来日し、1871年1月1日より大阪の兵学寮に雇用されているので、カズヌーブが再び日本の土を踏んだのはほぼ同じ頃だったものとみなされる。

カズヌーブの再来日後のはっきりした動向を示す記録は、1873年まで待たなければならないが、この時に明治新政府に提出した「産馬意見書」³⁾にこう書かれている。フランス政府よりなん年前に日本政府へアラブ馬26頭を献上したおり、フランスの牧場よりこれらの馬を日本へ輸送する任を荷ったのは自分である。そして小金井牧場へこれらの馬を連れて行き、そこで馬の世話をする係の者を教育し指導する手筈であったのだが、突然の変事が起きたことにより、これは御破算になり、馬もその後は乗馬になったりで離散してしまった。しかし、現在までのところ9疋の種馬を確認しており、なお調査をすればなん頭かをみつけられるかも知れないと書いている。この意見書の日付の書き込みは、「癸酉三月」となっているので、

カズヌーブは1873（明治6）年3月前にはすでに日本にいて、独自で25（26）頭の馬の消息を追い求めていたことになる。

カズヌーブはこの意見書が評価され宮内省に雇い入れられ、まず明治6年4月1日より同9月30日までの半年間、月給250円での契約が取り交わされた。退役下士官あるいは馬匹飼育伍長の肩書きからすると、この月給250円は破格といってよい俸給であった。

カズヌーブが宮内省雇いになってまだ間がない明治6年6月、彼のために教師館を新築する計画が持ち上がり、皇居に近い西丸旧御厩に53坪の家屋が建てられることが裁可された。ところがこの新築の教師館が完成したとき、彼の契約期間が切れた後であり、宮内省の方には契約延長の意向がないことがわかり、教師館新築の儀は正式に決定をみながらも白紙に戻された。この時のカズヌーブの宮内省での肩書は、「乗馬術馭車法調馬教師」となっていた⁴⁾。

宮内省を雇い止めとなったあと、カズヌーブは陸軍省に雇い入れられ、明治6年12月1日より月給300円でまず半年間の契約が結ばれ、さらにその後もう半年間の雇い継ぎが認められた。この当時のフランス人陸軍教師の月給は下士官であれば150円、少尉クラスで270円であったから、カズヌーブは騎兵中尉クラスの厚遇を受けたことになる。

明治5年4月11日（1872.5.17）、第2次フランス陸軍顧問団として16名のフランス人教師が来日したが、このメンバーのひとりであった騎兵下士官・馬術教師フランソワ（Jean François）は150円、また陸軍伍長・蹄鉄工ヴィエスト（A. Viest）も同じ150円の月給であったから、カズヌーブのそれは半端な額ではなかったことがわかる。因みに、日本人の官等と月給とで示すと、月給300円となると三等勅任官クラスで、陸軍であればさしずめ少将クラスの俸給に匹敵した。それがフランス人軍人であれば中尉クラスの月給であったから、いかにお雇い外国人が高給をもって雇用されていたかがよくわかる。

明治6年当時、陸軍省には30名を少し超すフランス人が雇用されていたので、宮内省を雇い止めとなったカズヌーブを陸軍省雇いに組み込んだのには、フランス人顧問団からの強い圧力が明治政府にかかったからであったろう。

旧幕府にナポレオン三世よりのアラブ馬を連れてきたのがカズヌーブで、今も彼は全国に散り散りになったこれらの馬の消息を追い求め、ゆくゆくは6年間で2万5千頭、8年で4万頭の駿馬を生産できるとまで言っている。このような優秀な人材であれば、陸軍省のフランス人顧問団のひとりとして追加要員に加えたいといった要請がまず間違いなくあったはずである。

陸軍省雇いとなったカズヌーブは、明治7年夏に東北各地に点在する馬の調査に出向き、その帰路の明治7年11月21日に病死した。この時の陸軍卿・山縣有朋より太政大臣・三條実美宛ての明治7年12月2日付けの公文書は次のようなものであった。

「當省御雇教師佛國人カズヌーブ儀、先般奥州筋出張申付候処、右出張中発病、磐前縣下浪江驛ニ於テ去月二十一日午後十二時二十分致死去候、此段御届申候也。十二月二日（句読点は筆者）」⁵⁾

ここにある「磐前縣下浪江」は「磐城国標葉郡浪江」のことで、磐前（いわさき）郡の平より海岸沿いに15里ほど北上したところにある寒村であった。この報知はおそらく電報をもって平より陸軍省へ打電されたはずだが、なぜこの当時カズヌーブが浪江にいたのか気にかかり、公文書関係を中心にかなり丹念に調査したことがあった。その結果、公文書ではなかったが、次の興味ある新聞記事が目にとまった。

「。日本政府ニ雇レタル法國陸軍教師ノ大炮隊（リュトナンシモンアゼ

ヌーブ) 氏、今ヨリ三日前日本政府ノ命ニ由リ、騎馬ヲ募操センガ爲メ、磐前縣ナミエ村ニ滞留シ在リシニ、十月十八日頃ヨリ不圖病ニ罹リ、之ニ因テ(タイラ)ノ地方官ヨリ醫官ヲ遣リ、之ヲ診察セシメタリ。尚又、陸軍省ヨリ仙臺ノ鎮臺ヘ令シテ、此隊中ノ醫員二名ヲシテ此病者ヲ療治セシガ、此醫員等ノ思察スル所ニ由レバ、其初メハ麻疹ナリト思ヒシモ、實ニ然ラズ。其後、漸ヤク疱瘡ナルコトヲ確定セリ。此病者ノ住スル居室ハ田舎ノ小家ニシテ、其健康ニ害アル又少シトセズ。且ツ兼テ脚部ノ甚シキ腫傷アリタルニ、忽マチ異常ノ焮衝ヲ發セリト。斯テ十月二十八日ニ於テ(シモン、カゼヌーブ)ハ逆モ全快覺束ナキヲ前知シ、通辨某氏ニ就キ云々ノ遺言ヲ述ベタリ。而シテ十一月上旬ニ至テハ病勢マスマス激烈ニシテ、毎日午後精神亂レテ本氣アルコトナシ。曾テ此事ヲ聞キ法國ノ醫師(ハブル)氏及ビ(ドクトル、ママセイ)氏ノ此地ニ至リシ時ハ、既ニ其死スル四日前ニシテ遂ニ其期ヲ失ナヒ、藥方効無ク十一月二十二日ヲ以テ(シモン、カゼヌーブ)氏ハ奄然トシテ死シタリ。抑々始メ病ニ罹リテヨリ殆ドニ閱月間、日本人ノ之ヲ看護スルコト、其懇篤實ニ至ラザル處ナシ。此事現ニ目撃セシ法國人等ノ心ニ記シテ、忘レザル處ナリ。殊ニ日本人醫員三名、通辨及ビ奴僕ノ如キハ爲メニ之レヲ謝セザルヲ得ズト。(句読点は筆者)』⁶⁾

この新聞記事のことはもうずいぶん前から知っていたが、この記事はどうやら横浜で発行されていたフランス語紙“L'Echo du Japon”よりの転載だったらしいので、この原紙を国内はもとより海外の多くの図書館や資料館、さらには外務省といった機関をも調査してきたが、これを保管しているところはなかった。

1874年12月1日の“L'Echo du Japon”紙に掲載されたらしい先の記事は、12月3日の「東京日々新聞」にフランス語から日本語に訳され転載さ

れたことになるが、極めて短時間で翻訳しているだけに、かなりフランス語に精通した日本人がこの記事に携わっていたことになる。

新聞の記事内容は一般には知りえない、同時に全く記録にないものを含んでいるので、この記事の執筆者あるいは提供者は、実際に浪江まで足を運んだフランス人であったと想起される。そうだとすると、記事にあるフランス人医師の「ハブル」か「ママセイ」のどちらかであったろう。

「ハブル」はおそらくファールブルのはずであるが、ファールブルなる医師は当時お雇いフランス人の中にはいない。医師でないとすると、このファールブルは榎本軍と関係を持ち、箱館戦争の真中に箱館に居り、カズヌーブらと共にコエトロゴン艦に収容され箱館を脱出した横浜在住の貿易商ファールブル (A. Fabre) が浮かび上ってくる。カズヌーブの重病の報を知り、箱館戦争での仲間を見舞いに、フランス人医師と共に3日ほどの日数をかけ、わざわざ遙か浪江まで出かけていったとしても、当然と受けとめることができる。

「ママセイ」の方は間違いなく、マッセ (Emile Massais) のはずで、彼は東校や高知藩病院で教えていたが、1873年2月横浜で開業し梅毒や皮膚病を専門とした医師である。1874年2月には高知にいたアントワヌ (Emile F. Antoine) の病気治療のため、わざわざアントワヌのいた長坂銅鉾山まで赴いたりしていた。まだ、30歳代半ばのマッセの行動範囲は実に広い。

陸軍省雇用の中尉格のカズヌーブであっただけに、彼に対する扱いは丁重で、平や仙台から3名の医師を派遣している。病名はやっと疱瘡と判明したが、ここでは箱館戦争で負傷した「脚部ノ甚シキ腫傷」が彼の死に大きく影響したことがわかる。

カズヌーブの東北視察の旅に、新聞記事によると他に日本人の「通辨及び奴僕」の2人が同伴していた。奴僕の方は荷物を持ったりする従者だが、この通辨の方は気にかかった。一般に陸軍省のフランス人が内地旅行をする際には、同格の日本軍人が同伴するのが常であったから、この通辨とは

まず陸軍省の中尉クラスの人物だったはずと想定はしていた。しかし、この裏付け資料が全くみつからず完全に諦めていたところ、カズヌーブの名前がある本を古書展で購入したからといって、それが友人より郵送されてきた。『開牧五年紀事』（廣澤安住著）がそれで、この書の記述により暗礁に乗り上げていた事跡が少し動きだした。

廣澤安住は旧会津の藩士で、維新後に想うところがあつて牧畜業に手を染め、青森県下の百石（ももいし）村に広大な廣澤牧場を苦心のすえ切り開いた人物である。廣澤はその書の明治7年の頃に、下記の重要な記述を残してくれた。

「(明治七年)九月中ニ陸軍省ヨリ鼓包武氏ヲ始メトシテ、佛人カズヌーブ等ノ數名、軍馬生産ノ事ニ就キ地方ニ見ル所アリテ、余ノ牧場ニモ訪ヒ來レリ。時ニ余ハ此地産馬ナキニハ非レトモ、牡多クハ二歳ニシテ、賣却シ存スルモノハ種子トスルモノ一村ニ一二頭ヲ限り、外ハ射利家ノ別ニ飼置ノ外多數ノ賣却スヘキモノ無キ形情ヲ説キ、若シ多數必用ニシテ必良馬ヲ得ントナラハ、別ニ愚見アリトテ牡馬産出ノ法方ヲ陳述セリ。其書今畧ス。後カズヌーブハ巡視シ歸テ、磐前ニ到レル時、病ニ罹リ没シタル由、惜ムヘキコトナリ。カズヌーブ我牧場及ビ近方ノ土地形質ヲ熟覽シ、譽ムヘキノ地ニハ非レトモ、又棄ツヘキニ非ルナリト評セリ。實ニ能キ所見ナリトス。又余カ新ニ開發シ牛馬舎及ヒ諸器物、僅ニ用ヲ足スヘキノ状情ヲ見テ、歐邏巴ニテモ新ニ事ヲ起スモノハ、皆此ノ如ク不自由ヲ忍ヘルヨリ始ムナリトイフ。余因テマキノンノ所爲モ其源由アルヲ知レルナリ。(句読点は筆者)」⁷⁾

カズヌーブは馬匹改良のための馬を求めて、遙か陸奥国の百石の安澤牧場まで赴き、その帰路に磐城国の浪江で病に冒されたことが明確になった。また、同行していた人物が、鼓包武なる陸軍省の軍人らしいことも判明し

た。珍しい氏名でもあり、念のため調査してみると、当時この人物は陸軍省の騎兵大尉で、正七位の鼓 包武であった⁸⁾。鼓は明治15年には少佐、明治19年には陸軍省の騎兵局次長の騎兵中佐と昇進しているが、彼がフランス語の通辨ができるほど堪能であったのかは調べはつかない。

なお、廣澤の文中にでてくるマキノン (Andrew Mckinnon) はイギリス人の農学や牧畜関係の専門家で、廣澤牧場の開場時に雇用された人物であった。

浪江で死去したカズヌーブの遺骸は、陸軍省の手で東京に運ばれ埋葬されたと推察されるのだが、青山や染井墓地を探索しても未だに捜しだすことができない。浪江のどこか寺の墓地でもあるのか、彼の墓の発見まではまだ時間を必要とするようである。

ナポレオン三世が贈呈した駿馬の最後の一頭とみなされる「パリス」の明治25年の新聞記事があるので、必ずしも記事内容は正確ではないが、次に記録しておく。

「上野動物園にパリスと名くる名馬あり。這ハ佛帝奈破崙三世が殊に其駿を撰び、文久年間幕府に寄贈されたるものにて、齡三十餘と聞え、毛色は青にて額は白きさし毛あり。骨相良馬に叶ひて、牧畜家の参考に供すべしとの事より、曾て農科大學へ預けありしを、先頃此の動物園に移されしなり。左れば、世の名工畫伯其生を寫さん事を願ひて、日々同園に赴くも少からねど、惜いかな此馬老いて右脹を損じたり。尤も此馬は純粹なる亞刺比亞産なれ共、五體左まで大ならずと。(句読点は筆者)」⁹⁾

注

- 1) 拙稿「箱館戦争に荷担した10人のフランス人」(『千葉敬愛経済大学研究論集』第31号、1987年1月)。

- 2) “The Daily Japan Herald”, 1867.5.30.
- 3) 『日本馬政史』(三) 73、74頁。
- 4) 「公文録」明治六年五月宮内省伺廿三。
「公文録」明治六年九月宮内省伺十三。
- 5) 「公文録」明治七年十二月陸軍省伺一。
「太政類典」第二編第六十八卷 外國交際十一 外國雇入五の五にも同文の文書がある。
- 6) 「東京日々新聞」明治7年12月3日。
- 7) 廣澤安住『開牧五年紀事』上 56・57丁。(明治12年4月板権届済)。
- 8) 『掌中官員録 全』(明治七年十月)、45丁。
『官員録 全』(明治八年九月改正)、49丁。
- 9) 「讀賣新聞」明治25年2月6日。